

2 章 トライデント・プラウシェアズの組織概要

2.1 概要

トライデント・プラウシェアズ (TP) のメンバーは**個人誓約者** (核の犯罪を阻止するための誓約書 - 9 章 9.1 参照一と、非暴力と安全のための誓約書 - 9 章 9.2 参照一に署名) であると同時に **TP アフィニティ・グループ** の一員でもある。現在の誓約者全員の名前は巻末に掲載されている。

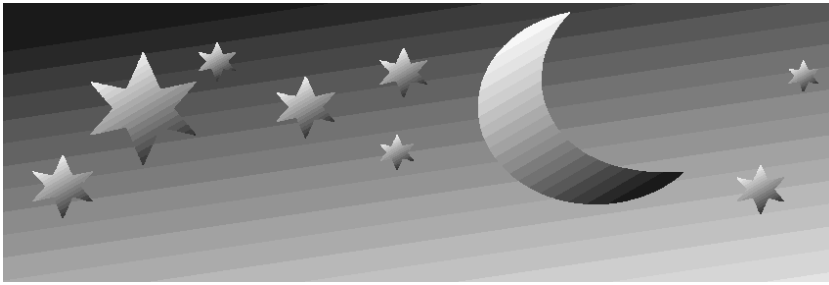
最大 15 名までの個人誓約者達がトライデント・プラウシェアズ運動に不可欠な管理と実務の仕事を受け持っている。これらのメンバーを**コア・グループ** (本章 2.1.1 参照) と称する。各アフィニティ・グループは半年に一度の**代表者会議**にそれぞれ 1 - 2 名の代表を送ることになっており、会議では合意によって決議や問題解決が行われる。そこで取り上げられる問題には、誰をコア・グループに入れるべきか、あるいは入れるべきではないかということも含まれる。**電子メールディスカッション**というものもあり、アドレスを持っているメンバーは誰でも無料で参加できる。tp2000@gn.apc.org に電子メールを送ればよい。この方法によって、いつ、どのように、何をすべきかを議論し、なすべき決定を知らせ、問題を提示し、誰でも情報交換ができ、お互いに影響を与え合うことができる。

「**誓約者の情報新聞 (pledgers Information Sheet)**」と呼ばれる 1 枚刷りの新聞がコア・グループのミーティングが開催された後に定期的に発行され、誓約者全員に送付される。内容はコア・グループのミーティング議事録やトライデント・プラウシェアズで行われていることを広く知らせるうえで不可欠な情報などである。「**スピード・ザ・プラウ (Speed the Plough : 早く鋤を)**」は不定期のニューズレターで、1500 名以上の支援者を抱える広範囲のネットワークに配布されている。

TP プロジェクトが進むにつれて、第 1 回の代表者会議でいろいろなアフィニティ・グループからコア・グループに対して、1998 年 8 月にクールポート (Coulport) で開催する 2 週間にわたる初めての軍縮キャンプを手伝って欲しいという要請があった。法律と法廷に関する総合的なサポートを含めて食料、救急用品、情報やメディア活動に対する最低限のイ

ンフラを提供して欲しいと依頼された。コア・グループによるこの支援活動は継続され、現在では**法的支援チーム**を常設し、スコットランドとイングランドの法廷に出廷する活動家を支援するとともに、法的防衛についての助言を与えている。**コーントンベール刑務所 (Cornton Vale) 支援グループ**は、コーントンベール刑務所で服役中の女性達を支援している。**プレスチーム**は各アフィニティ・グループが地元で行っている地域的なプレス活動と協調してうまく機能している。新たに支援を申し出る人が増えるにつれて、もっと多くの支援や活動が実現するだろう。

個人あるいはアフィニティ・グループがトライデント・プラウシェアズ全体に対して提案や構想がある場合は、別のメンバーやアフィニティ・グループと連絡をとったり、ミーティングを召集したりして議論の口火を切り、構想に対する合意を築き上げることができる。これまでコア・グループは必然的にキャンペーン全体について、毎日多くの決定を下さざるを得なかった。もし TP 誓約者あるいは TP アフィニティ・グループがコア・グループのメンバーの仕事に不満がある場合は、コア・グループに対して、あるいは半年に一度の代表者会議で、または直接個人誓約者全員と全アフィニティ・グループに対してその問題を提議することができる。私たちはできる限り合意の上で活動するようにしている。提案された行動あるいは決定に対して重大な異議が唱えられた場合、合意が得られるまでは実施しないというのがコア・グループのこれまでの方針である。全体の枠組みと譲ることのできない基本原則は、運動がスタートした時点で既に決定されている。しっかりと一貫性のある運動をどのように実行し発展させていくかということを議論している。しかし活動をともにしているすべてのグループの合意が必要な重要決定事項もある。たとえば、対話と交渉チームが政府とミーティングをもつようになった場合、さらに私たちの要求のいくつかが通った場合、私たちは非武器化行動を中止するかどうかを決定しなくてはならない。この決定は誓約者全員との協議や意見をもとに合意の上で下される。同様にいつ、どのように TP



運動そのものを中止するかという決定も必要になってくるだろう。TP 運動は当初 2000 年 1 月 1 日を期限としていたが、その時点で誓約者達が TP を継続すべきだと決定した。この決定は毎年見直されている。

2.1.1. コア・グループ

最初のコア・グループは 6 名で構成されており、もともとは 1997 年 6 月にいろいろな平和ネットワークに向けて発信された初期概要説明 (Initial Explanatory Briefing) に賛同した人の中から進んで名乗りをあげた人達の集まりだった。1998 年 5 月にキャンペーンを公に打ち出す前の初期の段階では、このコア・グループは「損壊罪の共謀」あるいは「当局が介入してくる可能性のある罪」に問われる危険をいとわず公然と責任のとれるトライデント・プラウシェアズ活動家のみで構成されていた。

初期のコア・グループはハンドブック、ビデオ、チラシの製作と、非暴力と安全のためのワークショップの立ち上げに従事していた。彼らは合意の上で活動し、他の平和活動家達にも広く助言を仰いでいた。その後に TP に参加した人達には十分に検討された一貫性のある運動が提示された。主要なルールはすでに決定されていてそれらを変えることはできない。最初のハンドブックには全体的な枠組みが説明されている。今回の新しい版は TP の展開に伴って加筆されているが、スタート時に決定された基本ルールの範囲を超えるものではない。

現在のコア・グループは、TP キャンペーンの目的達成のために実務的な面と管理的な面の業務を共に遂行できると考える 13 名によって構成されている。コア・グループは合意の上で決定を下す。コア・グループへの参加を希望する TP 誓約者は現在のコア・グループに申請することができ、コア・グループは申請者がどれ位働けるかに基づいて決定する。

現在のコア・グループのメンバーと電子メールアドレスは以下の通りである：

モラグ・バルファー (Morag Balfour)

mo@mbalfour.freemove.co.uk

シルビア・ボイズ (Sylvia Boyes)

robinandsylvia@yahoo.co.uk

マギー・チャーンレー (Maggie Charnley)

mcharnley@freenet.co.uk

アリソン・クレーン (Alison Crane)

alison.crane@ntlworld.com

ジェニー・ガイアウィン (Jenny Gaiawyn)

mia_kat@yahoo.com

カースティ・ギャザーグッド (Kirsty Gathergood)

-

アンドリュー・グレイ (Andrew Gray)

andrew@andrewgray.uklinux.net

ヘレン・ハリス (Helen Harris)

coney@gn.apc.org

デビッド・ヘラー (David Heller)

d.a.heller@geo.hull.ac.uk

サラ・レズンビー (Sarah Lasenby)

sarahlasenby@breathmail.net

デビッド・マッケンジー (David Mackenzie)

davidmc@enterprise.net

ジェーン・タレンツ (Jane Tallents)

janejim@gn.apc.org

ブライアン・キュール (Brian Quail)

bb_lovenest@yahoo.co.uk

最新の住所と電話番号は下記宛てに請求すること：

デビッド Tel.01324 880744

2.1.2 キャンプでの協力

TP キャンプに参加するアフィニティ・グループは食料、キャンプ用品、あるいはメディア用の備品を自給するというのが最初の計画だった。現在はこういった業務は中央で統括する構造になっており、メン

バーは核兵器廃絶活動に専任できるようになっている。しかしながらそれはそれぞれの業務に貢献している全ての人達のおかげである。

2.2 銀行口座

「トライデント・プラウシェアズ」名義の口座が開設されており、コア・グループが管理している。全員無償で働いている。コア・グループで働いている人を含め各活動家は誓約者になったときに 10 ポンド（約 1800 円）寄付することになっている。寄付は大歓迎である。資金はキャンペーンの運営にまわされ、このハンドブックやビデオの製作費用、電話等の通信費に当てられる。

大部分のアフィニティ・グループはそれぞれの財政を自分達で賄っている。各グループは旅費や通信費を捻出するために資金を集める必要がある。また「アフィニティ・グループ支援基金」が設立されているので、資金調達が困難なグループは申請すれば利用できる。「法的支援基金」と「収監者支援基金」も設立されている。事務局あるいはコア・グループを通して申請できる。

2.3 非暴力と安全のためのガイドライン

非常に緊張した状況下で大勢の人達と一緒に活動するので非暴力の訓練が絶対に必要である。中には 400 人から 500 人が現場にいた封鎖もあった。最大限の核非武器化活動を計画しているグループの中には、非常に有毒で放射性のある核を装備した強力武器システムの武装解除を企てているものもある。したがって安全への配慮がきわめて重要な問題なのである。トライデント・プラウシェアズの正式なメンバーは全員 2 日間の非暴力と安全のためのワークショップに参加しなければならない。このワークショップにはグループ単位で申し込み、アフィニティ・グループの一員として参加するのが理想である。全員がアフィニティ・グループに属していなければならない、自分自身を積極的なサポーターと定義するにしろ、積極的な核兵器廃絶活動家と定義するにしろ「核の犯罪を阻止するための誓約書」に署名していなければならない。アフィニティ・グループの枠内で活動しているサポーターの危険は非常に少ないものの、全員が準備を怠らないことが賢明である。それはま

たサポート活動の本質を認識することでもある。つまり皆が自分のできることをやり、関与している者同士がお互いに対して責任をもつ。仕事はどれも等しく重要ですべての任務がきちんと全うされなければならない、お互いがそれらの仕事を認め、尊重しなければならない。

ワークショップは一貫性をもっている。各グループは同じ題材を扱う。都合がよければ複数のアフィニティ・グループが同時に同じワークショップに参加することもできる。今後の仕事についての助言を得、準備すべきことについての知識を獲得し、必要ならば、後から再びファシリテーターの助けを要請することができる。コア・グループは、各アフィニティ・グループと連絡を取っている。コア・グループは、ファシリテーターとグループとの話し合いに基づき、そのグループをトライデント・プラウシェアズのアフィニティ・グループ（本章 2.6）として登録するかどうかを決定する。これは国家当局、テロリストまたは暴力的な人などの潜入を防ぐために最も必要な安全対策である。

トライデント非武器化行動によって、自分自身や他の人を傷つけないように、あらゆる予防策を講じておかなければならない。同時にまた責任の重さは認識する必要があるが、そのために行動力がそがれるようなことが、決してあってはならない。軍が責任ある乗組員の管理を確実にできるのと同様、私たちにも責任をもって核兵器廃絶行動を確実に実行する組織を作り上げる力がある。実際のところ、ドラッグの使用と常に核戦争の瀬戸際に立たされているストレスで「自制心を失っている」軍の隊員に関する調査を考慮すれば、私たちの方が優れた仕事ができるようにさえ思える。

私達の活動やキャンプの中には誓約書に署名していない人が参加できるものもある。そういう機会を利用して、新しい人がアフィニティ・グループに入ったり、グループを作ったりする可能性を探り、訓練を受けることができる。このような人達は短期間の非暴力と安全に関する半日ワークショップに参加し、譲ることのできない基本原則を含む非暴力と安全のための誓約書に署名することができる。

非暴力と安全に関する7つのガイドラインがト
ライデント・プラウシェア
ズの基本原則であり、譲る
ことのできないものである。
それらは、世界中の非暴力と
いう考えと行動に基づいてい
る。これらのガイドラインを
受け入れられない人に、この
運動は向いていない。すべて
の活動家はそのガイドライン
を十分に検討して、署名する

かどうかを決めるべきである。ガイドラインを尊重
し、非暴力と安全のための誓約書（9 章 9.2）に署名
した活動家だけが参加できる。各アフィニティ・グル
ープは、独自の基本ルールを付け加えたいと考える
かもしれない。ガイドラインの特徴は、相手側を
含め活動に関与しているすべての人々に対する敬意
と配慮である。つまり、人を傷つけ、損害を与え、
品位をおとしめることを、徹底的に拒否するという
ことである。苦しみ避けられないものなら、活動
家は、他人に苦痛を与えるより自分自身で引き受け
ようとする。相手の人間性に訴えるということと、
一方の側からのみの真実など有り得ないという認識
が盛り込まれている。手段は目的を達成するための
ものであるから、手段と目的が矛盾してはならない
という考えに立っている。

私たちの基本原則に矛盾する行動を、いくつか挙げ
てみよう。放火は決してやってはならない。たとえ
ばラグビーのタックルの様に警備員を手荒く扱って

もいけない。設備や機械類に損害を与えることは私
たちの行動の一部であるが、人
の身を危険にさらすような方法
をとってはならない。複合的ト
ライデント核兵器システムの一
部である設備だけを標的にすべ
きである。
各活動家とアフィニティ・グル
ープは、全ての人の安全を確保
するために、自分達の非武器化
行動の結果として起こり得るこ

とを、十分に時間をかけて検討すべきである。基地、
事務所、潜水艦などへの出入りに際しては緊急の場
合に備えて、少なくとも一本の安全なアクセスルー
トを確保しておくべきである。破損したガラスや切
断面には印をつけて、人の注意を喚起するために張
り紙を貼っておかなくてはならない。突き出してい
たり落ちたりしたものが人をけがさせたりしないよ
うに、壊れた部分は、安定した状態にしておかなけ
ればならない。

私達の行動すべてに優先する原則は愛である。すな
わち、生き物は絶対に傷つけてはいけなし、常に
穏やかに自制心を持って行動しなければならない。

「平和運動についてその方法を示しながら愛情あふれるスピーチの形で語ることが出来るだろうか？それは平和運動に関わっている人が平和であるかどうかにかかっていると思う。平和的手段で平和を目指すのでなければ平和のためには何もできない。」

Thich Nhat Hanh





1 活動家はアフィニティ・グループの一員であり誓約書に署名しており、コア・グループに登録されていて非暴力と安全のためのワークショップに参加した者でなければならない。

2 私達の活動はオープンで公開されるという理念に基づいている。

私たちがその一端をにない、日々改善のために闘っている民主主義においては、誰もが他人の行動に疑問を投げかけたり、批判する権利をもっている。そのため質問に答えたり、行動に対する責任をとる人間が必要である。したがって私たちは、自分達のアイデンティティを隠すために仮面をかぶったり、警察から逃れようとしたり、行動を完全に秘密にしたりはしない。核兵器廃絶の計画や企画は、秘密にするかもしれない。しかし、一度行動を起こしたら、活動家達は自分達の行動の全責任を負うために現場に留まるだろう。

3 私達は誠実な態度で接し、遭遇する人達に敬意を払う。

道徳をふりかざしたり、警察や防衛に従事する人など接触をもつ人達を口頭で攻撃することで、不必要な分裂を生じさせたくない。適切であると判断すれば、彼らを丁寧に話し合いに引き込む。すべての人間には無限の価値があり、私たちと対等であるばかりでなく、核兵器廃絶プロセスにおける同盟者なのである。いつか核兵器廃絶が実現した時には、今私たちが挑戦している政策や措置を施行している当局や部署の担当者が、正式な核兵器廃絶プロセスを現実遂行する担当者になるかもしれないのである。彼らが実際に核弾頭を撤去し、安全な倉庫に保管し、ミサイルを米国に返還し、潜水艦を廃船にして私たちが着手した核兵器廃絶プロセスを完遂する担当者になる可能性があるのだ。

4 いかなる個人に対しても身体的暴力や言葉による陵辱を行使しない。

暴力には身体的暴力と心理的暴力があり、「いかなる個人」という表現には私たち自身も含まれる。緊迫して圧力のかかった状況では、スローガンを叫ぶことさえ脅迫的で攻撃的と見なされることもある。状況を判断して、適切な行動をとらなければならない。私たちに対して暴力を振るう人はいないと仮定しているので、防衛上の装備はしていない。所有物を破壊することを暴力的であると考える人もいるが、私たちは平和的で安全な破壊や本質的に暴力的な所有物を取り壊すことが暴力的行為にあたるとは考えていない。実際、それは平和的で、必要で、責任ある非暴力行為であると考ええる。

5 武器は持たない。
核兵器廃絶のために私たちが携帯する道具は、いかなるものも人を脅かすような方法で使用してはならない。

たとえば警備員が私たちの方にやって来たら、道具をおいて空っぽの手を広げて見せればよい。

6 トライデント・ブラウシェアズキャンプや活動にアルコールやドラッグ（医療目的以外で）を持ちこまない。キャンプに宿泊している時や活動に参加する予定の時に上記の物を敷地外で消費することも含む。

註：キャンプから離れたところでアルコールやドラッグの使用が認められているイベントに参加する人は、キャンプから出て、これらの物質の効果がすっかり消えるまでキャンプには戻らないことを約束して署名する。

これはトライデント・ブラウシェアズのすべての集会に適用されるルールである。ゆえに、参加者全員が安心感を得ることができる。警察がやって来たとしても、彼らもまた、私たちが信頼できるのである。誓約書にこの項目があるのは、安全と非暴力を確実にするためだけであり、これらの物質一般について、あるいは人々のライフスタイルについて何らかのこ

メントをするものではない。

7

活動に関する色々な取り決めに すべて尊重する。

このハンドブックにある非暴力と安全のためのガイドラインは、運動全体に適用され、それらは譲ることのできない基本原則である。しかし、活動を進めていくうちに必要となる決議や取り決めは半年に一度開催される代表者会議などで協議される。



2.4 共同責任

非暴力抵抗運動においては、政府当局がリーダーとみなした者や、手当たり次第に何名かを連行して、キャンペーンの成功を阻止しようとするのがよくある。深刻な法的制裁に脅かされる者はほんの数名であり、それも実刑にはならないだろうが、最終的な結論が出るまで数年を要することもある。その間、サポーター達が意気消沈したり、怯えてしまって確信をもてなくなり、士気を失うという結果を招くことがある。

こうしたキャンペーンでは、情報が数名の人に握られている場合が多いが、そのような場合、誰かキーパーソンが「抜けた」（たとえば公判審理のために身柄を拘留されたりして）時に、キャンペーンにとって必要で重要な情報が欠落してしまう危険性がある。また、数名の人だけが情報を握っていると、他の人達は十分に関与あるいは参加しているとはいえず、不健全な権力構造が生まれてしまう。

こういった問題を避けるためには、全員がすべての関連情報を把握しているようにしなければならない。いかなる場合にも、ブラウシェアズ活動は完全にオープンでなくてはならず、参加者全員、警察、裁判所、政府当局などと情報を共有するようにしなければならない。私たちに隠すべきものは何もなく、国際法を支持し、人間としての倫理をふまえて行動しようとしている。このハンドブックは、組織や意思

決定についての情報のみならず、技術上および法律上の情報をも共有するという、私たちの姿勢を示す一つの例でもある。誓約者全員が、トライデント・ブラウシェアズに参加しているすべての人の名前と住所の最新リストを持っている。トライデント・ブラウシェアズの活動家には、積極的サポーターと積極的核兵器廃絶活動家が含まれる。もしコア・グループが謀議の罪で拘留された場合（極めて稀ではあるが起こりうる）、他の活動家達は互いに連絡を取り合って新しいコア・グループを決定し、そのグループと共に活動を進めていく。私たちにリーダーはいない。自発的にやりたいと思う人達だけでいろいろな仕事をコーディネートする。このハンドブックに掲載されていない情報が欲しい人は、コア・グループの現メンバー(本章 2.1.1)に連絡して欲しい。ウェブサイトでは定期的に最新情報を掲載している。

私たちは、平和的な軍縮行動に従事している地球市民という仲間として互いに完全に共同の責任を負うという実験を試みている。個人の能力に応じて互いに責任をもち、平和なブラウシェアズ活動によってもたらされる個人的および法律的结果は、どんなものでも共有しようとしている。各アフィニティ・グループは、共同責任のコンセプトを研究し、どのように解釈するかを決めなければならない。およそ半年に一度開催される各種の代表者会議で互いにチェックすることができる。会議の議事録は誓約者全員に送付される。トライデント・ブラウシェアズの総合的な決定は、これらの会議で行われ、各グループは代表を一名送らなければならない。そうでなければコア・グループだけが決定権を握ることになり、それは誰にとっても不公平である。

政府当局は、大部分の人がすぐに疲労して、粘り強くやり続けられないということをよく知っている。共同抗議を続け、互いに助け合い、何度逮捕されても常に活動に復帰するような活動家には慣れていないだろう。抗議運動をする人達はたいてい一度逮捕されると止めてしまう。願わくは投獄されるまで活動が続けたいものである。私たちは真剣に核兵器を廃絶することを考えている。これは一日限りのデモンストレーションではなく、核兵器システムを廃絶するためのグループとしての共同の企てなのである。私

私たちはブラウシェアズ活動に献身的に参加し責任を負うという約束をし、それぞれが数年間の投獄の可能性（非常に稀ではあるが）を受け入れたのだ。つまり私たちには、非常に並外れた高度な責任をグループとして負う可能性があるということである。したがって、当局は私たちの活動にいかに対応するかという対策を練る際には、このことに留意しなければならないだろう。当局の決定がいかなるものであっても、私たちは核兵器廃絶に向けて自分の本分を尽くす。英国の刑務所に数百名のブラウシェアズ活動家が収監される映像を見た一般民衆によって、核兵器廃絶のために最終的に必要な圧力がかけられることを願う。

共同責任についてはよく検討する必要がある。共同責任とは道徳的責任を負うということなのか、それとも罰金や賠償金の支払いにおいても助け合うということなのか？個々のアフィニティ・グループは数百ポンド(数万円)にしかならないような最小限の損害しか出さないことを選択しているが、数百万ポンド(数億円)にも相当する損壊の賠償金を支払う責任をすべてのグループが負うということは論理的に説明できるのか？たとえ刑務所に何人入ることになろうとも、それぞれのグループの最も重要な貢献はできる限り核兵器廃絶運動を継続していくことなのだろうか？もし数名が連行され起訴されたら、残りのものは出廷して、ひっきりなしに立ちあがって、国際法を遵守したことにより自分達も有罪であると言い続けて、法廷を混乱させ、法廷侮辱罪に問われるような行為をするべきか？法廷あるいは刑務所を封鎖すべきか？あるいはもっと核兵器廃絶運動に力を注ぐべきか？これらすべての選択肢について熟慮検討し、グループで議論できないだろうか。あなたのグループは、基本原則の範囲内であれば自主的に決定ができるということを忘れないように。

2.5 ブラウシェアズ活動家/誓約者

ブラウシェアズ活動家は口頭で、またはチラシや「トライデント・ブラウシェアズに参加しませんか」(9章9.10 参照)を使用して募集している。適当な場所と思えばどこでこれらを配ってもよい。新しくブラウシェアズ活動家になった人で自分のアフィニティ・グループを持っていない人や、地元でグループを組むこ

とのできない人には、私たちがアフィニティ・グループを探してそこに入れてもらうようにしている。私たちはアフィニティ・グループごとに活動するように強く要請する。お互いが十分に知り合える小さなグループは、必要とされる緊密なサポートを提供しあえるし、警察の囹（おとり）が潜入しにくく、各グループは自主的に活動し状況の突然の変化に容易に適応できる様にしておくべきだからである。

コア・グループは一定量の総合的サポート（組織全体の綿密な計画の検討、資料の作成、大規模集会の世話、国内および国際的なプレス活動、警察組織の監視、公判の傍聴、情報共有の拠点としての活動など）を提供してはいるが、それにもかかわらず、中央集権的で権威主義的な組織構造をつくるための資金もリソースもなければ、つくろうという気もないのである。そのような構造は第三者によって簡単に壊されてしまうし、メンバーの能力を十分に発揮させることにもならないであろう。各アフィニティ・グループは独立していて、独自の個性を育てていくことができる。コア・グループが行っていることは一般的な枠組みを提供し、プロセスを容易にして、アフィニティ・グループのメンバー全員がトライデント・システムの廃絶に向けて、共に力強く行動できるようにしていくということだけである。多様性がありながらも細心の、そして熟慮された協力体制が私たちの組織の強みである。各アフィニティ・グループがそれをできる限り良いものにしていくだろう。私たちは皆、そうする責任がある。もし組織の中心的基礎構造が崩壊したとしても、自立した自治権のあるアフィニティ・グループがその後を引き継いでいくであろう。

コア・グループはトライデント・ブラウシェアズに参加する個人やアフィニティ・グループを選びその決定に関して最終的責任を負う。決定に関する助言は、各個人や各アフィニティ・グループが行うし、各ワークショップ終了後にコア・グループに対して推薦をする非暴力と安全のためのワークショップのファシリテーターも助言を行う。少なくとも、1名のコア・グループのメンバーが各アフィニティ・グループと連絡をとり、そのグループ専属の連絡役となる。これは率直に意見を交換し、隠し事のない極

めて理にかなったオープン・プロセスの一つの形である。つまり囹やテロリストを排除し、そのアフィニティ・グループが不審を感じるような人を入れてくすむように手助けする手段である。参加しようとする人達の行動力を奪うものではなく、私たちの行動が、できる限りの責任を負う安全なものであるということを、純粋に確かめるための手段である。

個人とグループはいつでもトライデント・プラウシェアズ（TP）に参加できるが、すべての人は、以下の条件を満たして初めてTP活動家として承認され、登録される。

- ・非暴力と安全のためのワークショップに参加した。
- ・ファシリテーターの推薦を受けた。
- ・非暴力と安全のための誓約書に署名した。
- ・核の犯罪を阻止するための誓約書に署名した。

2.6 アフィニティ・グループ

トライデント・プラウシェアズの各アフィニティ・グループは3人から15人のプラウシェアズ活動家で構成され、彼らは、核の犯罪を阻止するための誓約書と非暴力と安全のための誓約書に署名した上で、核兵器廃絶運動に従事している。アフィニティ・グループは少人数なので議論、参加、サポートがよりスムーズに機能する。規模の大きいグループでは数名の人によって支配される傾向にあり、議論から取り残された人達は、要求が叶えられなかったり、平等に貢献できないことがよくある。

アフィニティ・グループは、その組織の性質から多様なスタイル、信仰、信念や文化を開花させることができる。自分が参加したい、あるいはつくりたいアフィニティ・グループの種類を熟慮すべきである。さまざまな信仰や国籍をもつ人達のグループがあり、特定の宗教や精神的側面に焦点を絞ったグループもあれば、国際的なアフィニティ・グループもある。演劇や音楽を中心にしたたり、曲芸の訓練を受けたアフィニティ・グループもある。古い友情の輪や、単純に地理的な条件に基づいたグループもあるだろう。希望すれば、身体障害者、おばあさん、良心的兵役拒否者、退役軍人、年金生活者や科学者達のための特別なグループもつくれるだろう。英国以外の国に



ベースを置くグループや、平和や環境問題、あるいは人権運動をベースにした特別なグループもあるだろう。

アフィニティ・グループがどんな性質をもっているかによってプラウシェアズ活動を行う方法やキャンペーン全体に何を提供できるかが決まってくるだろう。たとえば、人を楽しませる才能のあるグループは、私たち全員を楽しませてくれるだろうから、大部分のグループが逮捕された後でしか自分達の核兵器廃絶運動を行わないようにする。精神的、宗教的側面に焦点を絞っているグループは、行動を起こす前あるいは行動の最中に信心深い雰囲気をもての人に提供できるだろう。特殊な曲芸の技能をもっているグループは、他の人が基地に進入できるよう手を貸してくれるかもしれない！

紹介された、あるいは自ら参加したアフィニティ・グループに溶け込めない人は別のグループをさがすためにコア・グループと連絡をとるべきである。これは個人の失敗でもなくグループの失敗でもない。アフィニティ・グループはとても個人的なもので、メンバーの組み合わせが最良の結果にならないこともある。このことを認識して他のグループをさがすのが最も良い方法である。きっと、誰もが気の合う仲間を見つけて、それぞれに特別の場所を確保するようになるだろう。

グループで非暴力活動を行うには、徹底した綿密な準備が必要であり、グループの一人ひとりが何をもって暴力的であるとみなすかを議論することは必須である。外部のファシリテーターと一緒に準備をすることも役に立つことが多く、非暴力を研究する2日間のワークショップの手伝いを「ターニング・ザ・タイド（Turning the Tide：流れを変える）」に依頼したのもそのためである。すでに数年間活動しているグループもさらに理解を深めるために、そして

非暴力についてさらに研究するために、ファシリテーターを要請するよう奨めている。常によく考え、反省し、そして発展していくことが強く求められる。

2.6.1 非暴力と安全に関するワークショップ

各アフィニティ・グループは、訓練を受けた2名のファシリテーターが指導する2日間のワークショップに出席する。これらのワークショップの目的は、トライデント・システムを非武器化する際の非暴力と安全に関する問題を研究し、個人とグループがどのように関与していくかについて準備することである。TP活動家全員がワークショップで同じような体験をすることを目指している。ワークショップではロールプレイなどの色々なテクニックが紹介される。ワークショップの内容には以下のものが含まれる。

- ・トライデント・プラウシェアズに対する理解を共有する。
- ・非暴力の意味するところを研究する。
- ・個人の恐怖と限界。
- ・個人およびグループのコミットメント。
- ・グループにおける意思決定と力関係。
- ・グループの維持とトライデント・プラウシェアズへの参加の準備。

非暴力と安全に関するワークショップはワークショップ申込書の受領後に手配される。ワークショップに申し込むためとファシリテーターの準備を助けるために9章9.3にある申込書に記入する。申込書がさらに必要なら、下記にて入手できる。

Trident Ploughshares, 42-46 Bethel St.,
Norwich, NR2 1NR.

2.6.2 グループのプロセス

アフィニティ・グループにおけるプロセスは、完璧な人間などいないのだから注意深く見守るべきである！定期的にミーティングを行い、お互いによく理

解しあうようにすることが賢明である。準備のため

には、最初は月一回の週末ミーティングまたは週一回の夜間ミーティングが必要だろう。お互いによくわかってきたら、それほど頻繁にミーティングを開



くことはないが、それぞれのミーティングでは次に挙げる役割のいくつかを毎回必ず違う人が受け持つようにするとよいだろう。それによってプロセスを観察できるし、手に余るような言動になる前に、問題を提起する助けにもなる。交代で担当することで、各人がグループの行動

のさまざまな側面を体験し、グループを強化することができる。

次のような役割がある。

・ミーティングのファシリテーター：ミーティングの前にグループのほかのメンバーとアジェンダを綿密に組み立て、グループがアジェンダに入っている議題に集中できるようにする。ファシリテーターは議長と次の点で異なる。議長は積極的にグループ全体と権限を共有し、グループ独自の意思を見だし、各メンバーが現実に行っていることに対して責任を分かちあえるように、グループに対して継続的に統制力を発揮する人物である。

・ヴァイブ(雰囲気)・ウォッチャー：表面に現れない感情的な動きを観察し、もしそれがグループプロセスに影響を与えているのであればグループに反映させる(みんなに明らかにする)。たとえば、もめごとを敏感に察知し、グループの助けを得て調停する。あるいはグループに疲れが見えたらすぐに休憩をとるかゲームをするように提案する。

・イズム・ウォッチャーあるいはオプレッション(抑圧)・ウォッチャー：人種差別、年齢差別、性差別やその他の権力闘争の存在に気付いたらグループに問題を提起する。特別な配慮を必要とする

人に対して、十分心配りがされているかどうかにも注意を払う。たとえば提案された身体訓練がある種のハンデ

ィキャップをもっている参加者には無理だという点にも注意すべきである。

「自分達でやったんだ」という声がきけた
ら、そのリーダーシップは最高である。

2

老子

タイムキーパー：全員集中し、アジェンダがきちんと消化されるようにする。ミーティングがビジネス志向であると同時に、いつも楽しくあるように必ず社交タイムを入れることを忘れずに計画する。

書記：決定事項を記録し、決定の内容を知らせるために全員に議事録を1部ずつ渡す。

2.6.3 合意による意思決定

意思決定は重要であり、各グループが合意の上で活動することが望ましい。投票による意思決定は少数派に不満と敗北感が残る：妥協案は誰の意見も通らないということなので全員に不満が残る。一方、合意による意思決定は各自の最善の考えを組み入れてそれぞれの構想の統合を促すはずである。

合意は受け身や支配的態度によって簡単に損なわれるので、合意の形を取るならば、参加者全員が合意に向けて心を尽すべきである。意見を明確化してまとめ上げ、合意の範囲を探るためには、強力に、だが中立の立場でまとめていくことが必要である。合意による意思決定は、迅速なまたは効率の良い意思決定方法ではない。非常に時間がかかるし、人数が多くなればなる程非効率的になる。したがって、どのような場合にも適する方法というわけではない。アフィニティ・グループは、迅速に処理しなければならない決定の場合には別の方法を採用することについて、同意を得ておく必要がある。

合意による決定は、全員がそれをグループとメンバーにとって正しいことであると、進んで認める場合にのみ実施される。たった一人でも決定を妨げることができるが、それが最終的にはより良い決定へと導いてくれることもある。この「拒否権」は控えめに責任をもって使うように注意すべきであり、不賛成の場合は常に代替案を出すことが望ましい。グループの個々のメンバーがブラウシェアズ活動に関係

する責任を取り、危険を冒すことになる場合には、合意による意思決定が特に重要である。自分達を数年間刑務所に閉じ込めることになるかもしれないような議案に対して、誰一人投票で負けることがあってはならない。たとえ長時間を要しても、グループの全員が100%気持ちよく受け入れられる決定でなければならない。一度決定されたら、全員がそれを支持しなければならない。

「ゴー・ラウンド」と「トーキング・スティックス」(本章 2.6.4) は、合意による意思決定を補助するツールである。全員が合意の内容をはっきりと理解できるように決定や提案を、明確に簡単な言葉で述べるのが不可欠である。複雑な決定は、より単純で扱いやすい決定に分解すれば相違点や賛同できない点に分かりやすくなる。

大規模なミーティングでは、合意による決定をするために「フィッシュボウル」というテ

クニックを使うことがある。各アフィニティ・グループの代表は、後方にグループのメンバーを従えて円形に座る。議論は代表者のみで行われるが、全員がそれを聴いている。必要ならばすべてのアフィニティ・グループがそれぞれの代表を呼び戻して議論し、決定してから代表が再び輪に戻る。代表者グループによる話し合いも、アフィニティ・グループ同様合意によって進められる。かなり大きなグループの場合はいくつかのフィッシュボウルを設置することもできる。



合意による意思決定を使うべきではない場合

グループ意識が存在しない時

グループとしての思考プロセスはグループが十分にまとまっていて共有する姿勢と認識を生み出せる状態でなければ効率良く進まない。グループ内に深い分裂があったり、メンバーがグループとしての絆より個人の欲求に重点を置くような場合、合意を行使しようとしても、失敗に終わってしまう。

良い選択肢がない場合

合意のプロセスはグループが問題の最良の解決策をみつける手助けとなるものであるが、最悪の選択肢から二者択一で選ぶのは有効な方法ではない。最悪の選択にメンバーが同意するはずがない。もし、グループが銃で撃たれるか、首を吊るかの選択を迫られたら、コインを投げることだ。

グループが決定に行き詰まったら、しばし立ち止り、このように問いかけてから、よく考えよう。

- ・ 耐えがたい状況にあるから立ち往生しているのか？
- ・ 選択というのは幻想であって現実では ないのか？
- ・ この茶番劇に参加しないことが私たちが最も権限を示せる行為かもしれないのではないか？

緊急事態

緊急の場合、迅速で即座の行動が必要な時、一時的にリーダーを指名することが最も賢明な行動方針といえる。

問題がとるに足らない時

ランチの時間を 40 分にするか 1 時間にするかを合意によって決めるために、30 分も費やしているグループを知っている。合意は思考のプロセスであるということを念頭に置いておくこと。何も考える必要のない時にはコインを投げて決めるのが良い

十分な情報がない時

丘を歩いていて道に迷って誰も帰り道がわからない時、帰り道を合意によって見つけることはできない。偵察をだして、このように問いかける。

この問題を解決するのに必要な情報を私たちは持っているか？

その情報を獲得できるのか？

スターホークの真実さもなくば挑戦 より

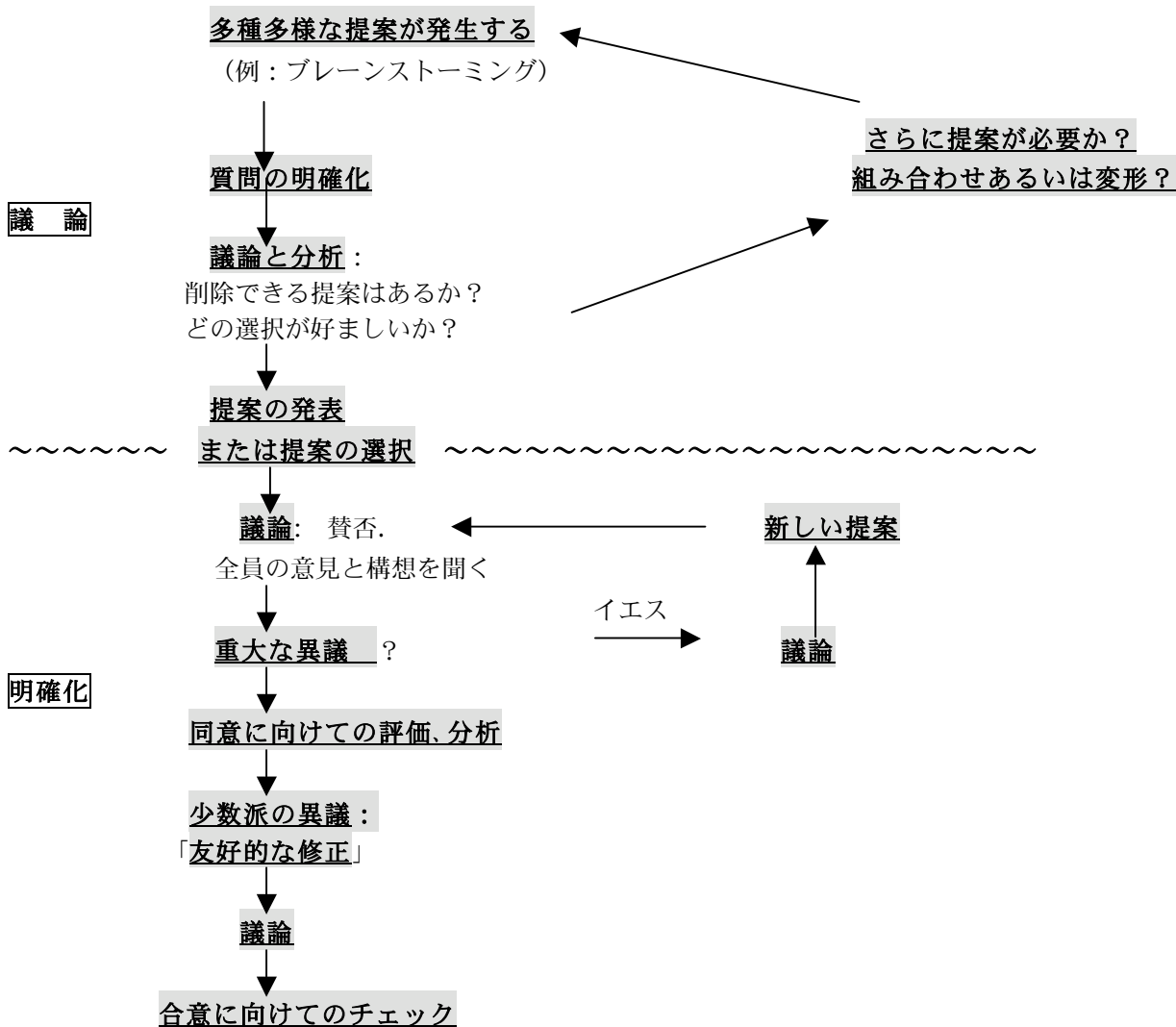
拒否／妨害の代替手段

十分に議論が尽くされまとめられた提案を拒否したり、妨害したりするのは重大な行為である。つまり、ない好みや利己的な衝動に基づくのではなく、倫理、事実、しかるべき結果、的を得た強い感情に起因する道義的論拠に基づいてよく考えてから行うべきである。意思決定プロセスが何度も繰り返され、さまざまな意見が取り入れられ、修正が加えられても依然として提案されたことに賛同できないなら、グループのプロセスを停滞させない反対の仕方を考慮す

るのが良いだろう。

- ・ サポートしない。これが必要だと私は思わないが一緒に行動する。
- ・ 保留（希望すれば議事録に記録される）。これは間違っていると思うけれど我慢できる。
- ・ 傍観する。私にはできないが他の人がそうすることを止めはしない。
- ・ グループから抜ける。

合意による意思決定プロセス



フィラデルフィア・ライフセンターの研究とリビングレボリューションのための資料マニュアル(*Resource manual for a Living Revolution*) (クーヴァー (Coover)、ディーコン(Deacon)、エッサー (Esser)、ムーア(Moore)共著) に基づくワークショップより。

アフィニティ・グループ内で合意によって決定される議題には次のようなものがある。

- ・どのような核兵器廃絶活動をどのように行うのか？
- ・各自の役割は？誰がアフィニティ・グループの代表になるのか？
- ・グループの名称、グループとしてのコミットメント (本章 2.6.6) は？
- ・いつ、どのようにフォローアップ・アクションをするのか？

2.6.4 小規模グループのためのツール

ゲーム、小休憩、おいしい食べ物などはグループ活動にとってどんな時にも役に立つツールである！

- ・ **アジェンダ**：事前にアジェンダを用意して配布しておくといよい。そうすれば出席者は自分の発表の準備をしたり、意見をまとめておくことができる。重要な議題をすべて消化できるように議題には優先順位をつけ各セッションの時間を決めておくべきである。深刻な話題から軽い話題へ、長いものから短いものへ、実際的なものから理論的なものへと問題を移すことによって進行のペースとムードに変化をつけることが大切である。議題と議題の間には、「超過調整時間」を見ておくといよい。かなり時間を超過している時は、ファシリテーターが交渉して最良の進行方法を見出す必要があるだろう。以下のツールは積極的な参加を促すため

のものである。

プレゼンテーション：メンバーの一人がある特別なテーマについて紹介する文章を準備し、それをグループに対して発表するとよい。このメンバーは最終的に要約を試みることもできるし、グループがそのテーマに関して行うべき提案や決定を明確に述べられるよう補佐することもできる。アジェンダのそれぞれの議題を別々のメンバーが発表することは責任の分担になるので良い方法である。

・ **ブレインストーミング**：ある特定の主題について、5 分から 10 分という非常に短い時間で独創的で創造性に富んだアイデアがたくさん出てくるツールである。全員が選ばれた主題について具体的な提案をするように求められるが、できるだけ簡潔で細部に言及しすぎないことが大切である。意見は大きな 1 枚の紙に記録される。全員がアイデアを出しきったら、最後にグループ全体で読み返し詳細について議論する。ブレインストーミングのルールは以下の通りである。

- ・ブレインストーミングの間は他人の意見に対してコメントしてはいけないし、書記による検閲もない。
- ・人の創造力を引き出し、短い時間で多くのアイデアを出させるという発想である。
- ・悪いアイデアでも他の人の良いアイデアを誘発

することもある。

・優れたアイデアは後でいろいろな方法で活用できる。

・ **ゴー・ラウンド**：特定のテーマについて各自が順番に意見を述べる方法。発言したくなければパスをして次の人にまわす。この方法の変形としてはフィーリング・ゴーラウンドがあり、各自がどう感じているかを述べる。

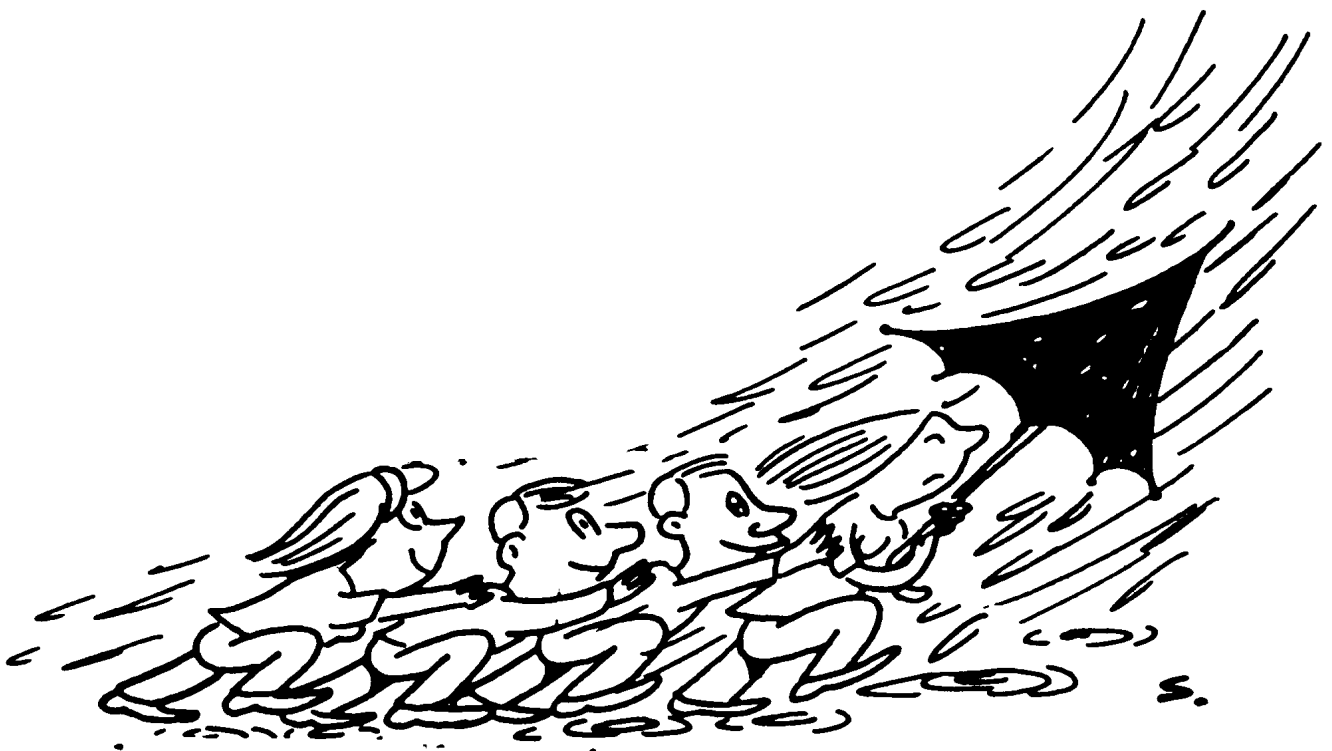
・ **トーキング・スティック**：棒や羽根、あるいは何か他の者でもよいが話しをする人がそれを持ち、話している人がそれを持っている間は誰も中断させてはならない。話し終わったら、それを中央の場所に返し、次ぎに発言したい人がそれを持つ。

・ **ペア・ワーク**：2 人 1 組で話し合ってから全員一緒に集まり、話し合った内容を要約する。

・ **朗読**：三つ以上のセンテンスの場合はコピーを用意する。

・ **フリー・ディスカッション**：うまくいけば、全員がかなり公平に意見を述べて、参加できる機会を得る。

・ **ビデオ**：議論を刺激したり、情報を共有させる手段として有効である。



・ **評価**：ファシリテーターにフィードバックするために必要である。また評価はグループ内のデモクラシーを育て継続的に改善して行くための方法でもある。評価にはいろいろなツールを使用できる。ミーティングやセッションについて、良い点と悪い点の一つずつ言わせたり、改善策を尋ねるというゴー・ラウンドも方法の一つである。

・ **ロールプレイ**：数名がある特定の場面を演じる。類似した場面、状況に遭遇したときに備えて、あるいは過去に経験した状況を評価するために役割を演じる（たとえばある活動に対する警察の暴力、レーザーワイヤーをくぐって進む様子、放たれた警察犬、逮捕後に治安警察に査問されている場面）。非常に具体的で詳細なシナリオと役割を作ることが重要である。参加者には役に入るための準備時間を少し与えて、ロールプレイをどれぐらいの時間行うかを教える。ロールプレイを終えた後や、他の人に交代するために中断する時には、役から抜け出るための時間が必要である。その間に自分が演じた役に別れを告げたり、グループの人に自分の本名を名乗って自己紹介することもあるだろう。同じシナリオでさまざまなリアクションを演じてみることもできる。そして「俳優」と「観客」を含めた全員がロールプレイについて議論し、感じ、考えたことを話し合い、反省する。ロールプレイの後の議論には少なくともロールプレイそのものの倍以上の十分な時間をかけるべきである。ストレスを与えるような場面のロールプレイには注意が必要である。我を忘れて激しい感情が表面に現れることがある。このパワフルなテクニックを使おうと考えている人は、本章の最後に挙げている参考資料によく目を通してロールプレイについての助言を得ること。

2.6.5 アフィニティ・グループのアウトライン・プログラム

私たちは、何ができるかということについて、信念を束縛している自身の従順さに挑戦しているわけだから非暴力行動をとるのは、難しいことかもしれない。お互いを良く知る。どのようにして活動に関わるようになったのか、ここに至るまでのステップ、希望や恐怖、最良と最悪のシナリオのことなどを語り合う。グループの中で信頼と友情を築く。行動すること、逮捕されるかもしれないこと、禁止命令を受けること、メディアのスポットライトを浴びることなどの懸念や心配について議論する。さらに活動

がパワフルになった時に伴う責任に、どのように対処するかを話し合う。できるところから実際の準備を始める。各自が貢献すべき時間を確定する。自分が貢献できることについては現実的に正直に申し出る。そうすればグループは必要ならさらに人を募ることができる。程度の差はあるが、行動の前、最中、そして終わってからとかなりの献身を要求されることを認識しておくこと。

各アフィニティ・グループは独自の学習と準備プランを綿密にたてるだろうが、準備段階で以下のようなテーマを組み入れると良いだろう：

ビデオとハンドブックを利用した作業

互いを良く知り、グループを確立する：

- ・ 経歴や個人的バックグラウンドを共有する。
- ・ アフィニティ・グループに名前をつける。
- ・ グループが特に焦点を合わせていることや特別な役割を決める。
- ・ 各メンバーの長期的な活動の可能性を探る。
- ・ 各自の関与の限界を探る。
- ・ コミットメントに関するグループとしての誓約と数年間にわたる活動を、どのように維持するかを決める。
- ・ 刑務所についての恐怖を調べ、対処するための戦略を練る。
- ・ 逮捕と投獄の経験を共有する。
- ・ ロールプレイの可能性。

グループの核兵器廃絶活動計画を立てる：

- ・ 参加したい活動と、参加したくない活動を決める。
- ・ いつ、どこで、どのような活動をするかを定める。
- ・ グループが一斉に活動するのか、それとも小グループに分かれて活動するのかを決める。
- ・ 道具が必要な活動には、その準備をしておく。
- ・ さまざまな活動の場面をシナリオにして、ロールプレイをする。
- ・ 法律についてのブリーフィングを通して作業をすすめる。

実際の側面：

- ・ コア・グループと連絡をとる担当者を選び、そのメンバーが代表者会議でグループを代表する。
- ・ 「グループの力をつける」2日間の非暴力と安全のためのワークショップに申し込み、準備を整える。
- ・ ファシリテーターやコア・グループに対してさら

に助けやサポートを要請すべきかどうかを決める。

- ・サポーターとして活動してくれる人を地域でさがす。
- ・資金集め。
- ・グループの電子メールによる連絡とディスカッション・フォーラムに従事できる担当者を決める。
- ・無料で法的な助言を与えてくれる地域の事務弁護士をみつける。
- ・法的支援グループと連絡をとり、法的な最新情報を得る。

実践：

- ・国家元首に手紙を書く。
- ・地区の国会議員にロビー活動をして、交渉と対話をする。
- ・グループの活動を説明するために、地域のプレスに働きかける。
- ・核兵器廃絶活動を数多く実行する。

2.6.6. アフィニティ・グループのコミットメント

理想としては各TP誓約者が：

- ・ファスレーン(Faslane)/クールポート(Coulport)あるいはオルダーマストン(Aldermaston)で開催される3ヶ月に一度の公開の核兵器廃絶集会に出席し、継続的に行動する。
- ・最大限の損害を与える核兵器廃絶活動をファスレーンあるいはクールポートで非公開に実行する；
- ・その他のトライデント関連施設で非公開および公開の核兵器廃絶活動を実行する。

しかしながら、これは大部分の人には過酷な要求であると思っているので安心して欲しい！それでも自分のコミットメントを現実的に査定してコア・グループに伝えて欲しい。そうすればコア・グループは現実起こっていることを把握して助言を与えることもできるしメディアとの対応や緊急時の対策を練ることもできるだろう。

参考文献と謝辞

2.3. 非暴力と安全のためのガイドライン

スウェーデンのプラウシェアズ運動からの助言が有益だった。

Turning The Tide -a Quaker programme on

nonviolent social change クウェーカー教徒の非暴力による社会変革プログラム各種の報告書 - Quaker Peace & Service.

Safe in Our Hands, Royal Navy Ammunition Depot Coulport - Faslane Peace Camp and Scottish CND, July 1993.

2.5 プ라우シェアズ活動家／誓約者

Turning The Tide-a Quaker programme on nonviolent social change クウェーカー教徒の非暴力による社会変革プログラム各種の報告書 - Quaker Peace & Service

Hope and Resistance Handbook, May 1997, Volzendorf, Germany -Stephen Hancock

Resource Manual for a Living Revolution, Cooper, Deacon, Esser and Moore, New Society Publishers (USA), 1981.

さらに理解を深めるために

A Resource Manual For a Living Revolution_- Virginia Coover, Charles Esser, Ellen Deacon and Christopher Moore, New Society Publishers, Philadelphia, USA, 1981.

Co-operative and Community Group Dynamics or your meetings needn't be so appalling - Rosemary Rendell and John Southgate, Barefoot Books(London),1981.

Defence in the Nuclear Age -Stephen King-Hall, Gollanz, London, 1958.

Despair and Personal Power in the Nuclear Age -Joanna Macy, New Society Publishers (USA), 1983.

Manual for Action -Martin Jelfs (revised by Sandy Merritt), Action Resources Group, 1982.

The Tyranny of Structurelessness -Jo Freeman, 1984, in *Untying the Knot*, Dark Star Press and Rebel Press, London.

War Resisters League and Organisers Manual - Ed. Hedeman, War Resisters League, New York, 1981.

を投じるまでには、ためらいもするし、引き返そうと思うこと
る。出来る訳がないという思いにも常にとらわれる。だがどん
為の第一歩にも確実に言えることがある。決意を持って身を投
ば神の摂理も働くのだ。それを無視すれば無数のアイデアと優
プランを殺してしまう。出来ること、夢見ることが何であろう
めるのだ。大胆さにはおのずから天賦の才と魔術が宿ってい
さあ、今すぐに始めるのだ。」

ゲーテ